

明する上で基本資料となり得る遺跡である。

8 木簡の釈文・内容

当初の予想を上まわる多数の木製品が出土した。梵字の書かれた木片、朱書きの鶴が描かれた漆器類、曲物類等、中世生活史を解明する上で貴重な資料が提供されている。その他には洪武通宝などの古銭が五枚出土している。木簡については、北側の階段状の堀の内壁上層から出土したものである（解説には向坂鋼二氏の御教示をいただいた）。

・「

天	形	星	王
大	日	二	七

」

・「薬師如来」

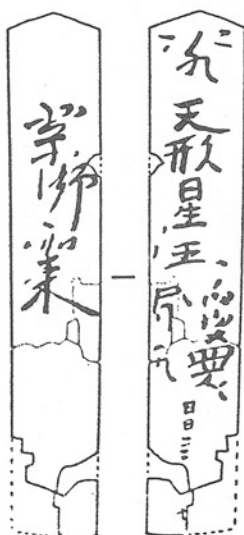
204×33×2.5 011

9 関係文献

焼津市教育委員会 『小川地区遺跡分布調査概報』

一九七九年

（原川 宏・山口和夫）



『但馬国分寺木簡』の刊行

但馬国分寺跡からは、一九七七年に寺域東南隅の外郭築地の内・外溝から三六六の木簡が出土している。すでに第三回木簡研究集会で報告されているが、昨年十二月兵庫県日高町教育委員会から、その正式報告書が刊行された。但馬国分寺木簡は、これまで国分寺跡出土の木簡として唯一の例である上、内容的に興味深いものを含み、ただに但馬国分寺研究のみならず、国分寺研究にとって貴重な史料となるものである。年代は神護景雲年間で、文書・荷札・習書などを含み、同時期の同寺の具体的な活動が知られるが、特に同寺の諸施設を記したものは同時期の造営状況を明らかにできる点で興味深い。これまで諸国国分寺の中で時期を限ってその造営の状況が知られる例はなく、八世紀後半における国分寺の成立の問題を考える上で大きな意義をもっている。報告書は、釈文・図版をのせ、総説では前にのべた問題を論じている。さらに参考資料として、墨書土器と他遺跡出土の但馬国関係木簡の集成を付載する。

但馬国分寺跡発掘調査団編『但馬国分寺木簡』（A四版 本文

三三頁 コロタイプ図版一四葉）頒価二千元 送料四百円

△申込先▽真陽社 〒六〇〇 京都市下京区油小路仏光寺上ル

振替口座 京都七二八二六七